

北の不思議な話

小川未明

青空文庫

おせんといつて、村に、唄の上手なけなげな女がありました。たいして美しいというのではなかつたけれど、黒い目と、長いたくさんの髪を持った、快活な女でありました。機屋へいつて働いても、唄がうまいので、仲間からかわいがられていました。

これらの娘たちは、年ごろになると、たいていは近傍の村へ、もしくは、同じ村の中で嫁入りをしましたのに、どうした回り合わせであるか、おせんは、遠いところへゆくようになつたのです。

村で、おせんの望み手がないのでなかつた。そればかりでなく、みんなは、その結婚をいいと思わなかつた。しかも、彼女は孤児であつて、叔母さんに育てられたのであるが、叔母さんも、この結婚には不賛成でした。なぜなら、相手というのは、遠い旅から行商にきた、貧しげな青年だつたからです。

この青年は、村へやつてきて、娘たちに、貝がら細工や、かんざしや、香油のようなものを並べて商つたのです。そして、ときに、彼は山のあちらの国々の珍しい話などを聞かせたりしました。おせんは、あるとき、彼が、子供の時分に両親に別れて、その父母の行方がわからないので、こうして、旅から旅へさすらつて探しているという話を聞

いたときに、同じ孤児の身の上から、彼に同情するようになったのでした。

「わたしは、山のあちらの明るい国へ行って、働いて暮らしましょう。」と、二人は誓い合った。

叔母さんも、ついに二人の願いを許さなければならなかった。そして、二人が、家を出るときに、

「いつまでも、達者で、仲よく暮らすがいい。」と行って、見送ったのでした。

いつのまにか、月日はたつてしまった。そして、彼女のことは、おりおり、村人の口の端に上るくらいのもので、だんだんと忘れられていった。村の機屋では、あいかわらず、若い女の機を織る音が聞かれ、唄の聲が、家の外へひびいていたのです。

ある年の秋も、やがて、逝こうとしていました。沖の雲切れのした空を見ると、地平線は、ものすごく暗かったです。そして、里の子供たちは、丘へ上がって、色づいたかきの葉などを拾っていました。

この日、ふいに、おせんが、村へ帰ってきました。彼女の姿は、昔とは変わっていたけれど、そのものいいぶりや、黒い、うるおいのある目つきには、変わりがなかった。「どうして、帰ってきた？」と、彼女を知っている人たちは、たずねました。

「わたしには、もう二人の子供があります。夫が長い間、病気で臥ていますので、知つた人を買つていただこうと思つて、商いにまいりました。どうか、わたしの持つてきた品物を買つてください。わたしは、船に乗つて、荒海を渡つてやつてきました。」といいました。

村の人たちは、顔を見合わせた。

「このごろ、沖の方は、暴れているだろうに……。」

「まあ、どんなものを持つてきたか……。」

おせんは、持つてきた品物を、みんなの前に拡げて見せました。いつか、青年が行商にきた時分に持つてきたような、青い貝細工や、銀のかんざしや、口紅や、香油や、そのほか女たちの好きそうな紅い絹地や、淡紅色の布などであつたのです。

「娘たちが見たら、さぞ喜ぶことだろう。男には用のないものだ。」

「ああ、男には、用のないもんだ。帰つて、女たちに話して聞かせるべい。」

男どもは、体よくその場を引き揚げました。しかし、女たちも、おせんが帰つたと知つて、品物を見にやつてきたものは、まれだったのであります。

おせんは、あちらから流れてくる、機屋でうたつてゐる唄を聞いて、自分の昔を思い出

して、涙ぐんでいました。

「おせんや、雪の降らないうちに、帰ったらいいだろう……。」と、叔母さんは、いいま
した。

もう、このごろは、毎日のように天気は暴れていました。おせんは、せつかく持つて
きた品物をしよつて、二度とこの村へはくることもなからうと思ひながら、暇ごいに歩
いたのでした。

海の上は、もはやゆくことができなかつた。彼女は、あちらの山を越えてゆかなけれ
ばならなかつた。村の人々の中でも、おせんをかわいそうに思つたものもあります。

「こんなお天気に、女の身であの山が越えられるだらうか？」

彼女が旅立ちをしてから、叔母さんは毎晩のように、門口に立つて、あちらの山
の方を見て案じていました。雨が降つたり、みぞれになつたり、風が吹いたりして、満
足の日がなかつたのでした。

ちようど、おせんが、あの山にかかる時分でありました。西の空が、よく晴れて、雲の
色が、それは美しかつた。さながらおせんが持つてきた、貝細工のように、銀のかんざ
しのように、紅い絹を拵げたように、淡紅色の布地を見るように、それらのものをみん

な 大空おおぞらに向かむつて投なげ撒まいたように……。

叔母おばさんは、この景けしき色みを見て、

おせん、

おせん、

西にしの空そらに、

紅べにさした……。

といつて、喜よろこびました。

これから、この文句もんくは、長ながく北ほっこく国こくに残のこつて、子こども供どもたちが、いまでも夕ゆう焼やけ空ぞらを見みると、
その唄うたをうたうのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集3」丸善

1928（昭和3）年7月6日

※表題は底本では、「北《きた》の不思議《ふしぎ》な話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の不思議な話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>